

第1回尾道市立小・中学校の在り方検討委員会  
グループ協議（Aグループ）

1 日 時 令和7年8月8日（金）20：00～20：40

2 場 所 尾道市役所4階委員会室

Aグループ

委 員：これから、お一人ずつご意見を伺いたい。

委 員：中学校のクラブ活動の指導については、どういう基本方針で臨んでいるのか。

事務局：まだ、部活の地域展開はやっていないので、それぞれの学校で部活の方はしている。学校規模によって種目は違っている。人数も違うので。

委 員：指導の時間は、問題になっていないのか。

事務局：今はそんなに朝練するところは少ないのではないかな。終わりは、学校の帰る時間が夏と冬で違うので、活動時間はそれに合わせている。

委 員：教員の仕事を精査した時にどうかなと思う。すごく心配である。

委 員：再編計画策定以降の学校再編状況の中で、向島中央小と三幸小の統合が「取り組んだが実現せず」になっている。何か大きな理由や障害があったのか。その辺が気になる。

委 員：詳しい説明は事務局に説明してもらいましょう。学校再編について、意見があるか。

委 員：学校再編のところで、地域性もあるから、地域が小学校に対してどういう思いを持っているのか、そういうところも掘り下げて、きちっと共通認識の中で進むような形を取らないとなかなか難しいと思う。

委 員：地域の同意が得られない統廃合はあり得ない。

委 員：地域性とか地域の思い、こういったものも学校再編の中に考えていくべきという意見ですね。

委 員：地域の中にいろんな会があるが、それらが結束して反対しているというのは、果たしてPTAの人はどういった風に考えているのか。子供が少なくなって複式学級になったりして散々言っているのに、統廃合を他の地域の住民は反対している。

委 員：子どもが減っていく現実もある中で、保護者の思いも大事ですね。

委 員：時間のかかる問題なのだろうが、地域の人々の反対がすごく多かったと聞いているので、あまり思いを汲み取ってきていないから、いまだに反対意見があるのかなと思う。本当に子どものためを思っているのだったら、もっと早く動かないといけない。当事者である子ども達が卒業したあとに解決しても遅い。子どもはちゃんとした自分たちの母校で過ごす時間が少なければ少ないほど、尾道に対する思いも希薄になってしまうんじゃないかなと思う。

委 員：地域の方は子どもがいなくなって寂しいと反対する人がいる。それは大人の事情であって、子どもの事情じゃない。いずれ居なくなるのだから。若い人が考えてやってもらってそれでいいと思う。

委 員：保護者と地域が話し合う機会はあるのか。

委 員：該当していた学校はすごく話し合いをしていたみたい。当事者でないので、詳しくは分からない。

委 員：保護者の思いと地域の思いは違うのか。

委 員：それは違う。我が子に関わってきたら、見方が変わってくる。

委 員：教育委員会としては、中学校区をある程度の範囲として考えているのだろうが、小学校区単位で地域はつながっているというふうに感じているが、そういう認識でよろしいか。

委 員：思いますね。

委 員：中学校の再編では反対は出ないけど、小学校では反対される。

委員：今度、中学校と小学校を一緒にして、こういう形で会議をしようとしている。

委員：小学校と中学校の在り方検討委員会なので、今日も話題にさせていただいたが、義務教育学校だとか小中一貫教育校、こういったものの在り方というのも併せて議論いただけたらと思う。

委員：8月にやる。

委員：それは、コミュニティ・スクールか何かか。

事務局：今、コミュニティ・スクールは、小中一緒になって、小学校も中学校も中学校区でやっているの、小中が地域と一緒にやってやる流れができているかなと思う。

委員：学校再編を進めていくのに、小中一貫教育というのを目指していくというのもあるし、連携のなかでも義務教育学校というのもある。詳しい議論というのは、この会をどんどん進めて行く中で、議論されると思う。地域性もあるし、どうか。

委員：中学校が1つになっても、町ごとの公民館で地域は分かれている。今は町が分かれて公民館も分かれている。町の統廃合があっていいのではないか。

委員：地域の中で大切にしているものを残していく重要性はある。バランスでしょうね。

委員：絶対残さないといけない。

委員：高齢化して、地域が活動しようとしてもできなくなってくる。若い人と一緒に一つにしなければいけない。

委員：今度、中庄と重井が一緒になるじゃないですか。そこで地域の考え方、基本的な認識の仕方が全然違う。価値観が違うところの折り合いをどういう風に付けたのか。

委員：折り合いは付けていない。半強制的にやってくれた方がやりやすくなる。

委員：そこは教育委員会が責任をもってやっていくところになる。

委員：地域としての思いはあるが、やっぱりいい学校を創っていこうということで、同じ方向を向いて子供のためにということが一番大事になってくる。

第1回尾道市立小・中学校の在り方検討委員会  
グループ協議（Bグループ）

1 日 時 令和7年8月8日（金） 20:00～20:40

2 場 所 尾道市役所4階委員会室

Bグループ

委 員：小中一貫校の勤務経験があるが、資料で挙がっているメリット・デメリットはその通りだと思う。たしかに卒業式などの節目が無くなることに對し、反発の声もあった。いまは解消されているが、カリキュラムなど保護者の理解を得ながら創り上げていくのは時間がかかるだろうと思う。

委 員：小中一貫校のメリット・デメリットという話があったが、事務局の方で現時点で把握していることはあるか。

事務局：まだ始まったばかりなので9年間を通してのメリット・デメリットというのは分からないが、学校再編により児童生徒数が増えたということで、部活動等の活動が活発になったという報告は受けている。

委 員：小学校高学年に教科担任制が入ってくるかと思うが、その場合先生の授業数は増えるのか、それとも減るのか。

事務局：今手元にデータを持ち合わせていないので、明確な回答ができない。

委 員：自分の認識では、教科担任制は非常に効果があるという声が多い。小学校の教員も得意な教科がある。それを専門とすることで指導力が発揮できるのはメリットである。時間数も大きなデメリットは感じていないと聞いている。しかし、学校規模や職員数などの関係で、全ての学校でできるわけではない。

委 員：教科担任制になったらいいなという現場の声もある。専科で集中することができる。

委 員：発達段階に応じて、低学年、中学年あたりは一人の担任が生活面も含めて担当したほうが良いのではないか。

委 員：小学校、中学校でも副担任があれば良いと思う。担任に相談できないことも副担任に相談できるということもあると思う。働き方改革の面からも、担任業務を分担できる先生が増えるほうが良いと思う。

委 員：地域の祭りなどで子ども達とかかわっている。いい小学校を創ってもらったおかげで若い人が来てくれている。家も増えてきている。その子どもたちが喜んでくれて、将来また戻ってきけるように地域を盛り上げているところである。

委 員：特別支援学級の学校選択制度について、ここの学校が良いといって選ばれる方が一定数いるということか。選ぶ基準はどのようなことか。

委 員：療育の施設の関係で、知っている子どもがいるところのほうが良いということで選ばれるというのは聞いたことがある。施設設備もあるかもしれない。

委 員：特別支援学級がどこもいっぱいと言っている。さらに増えているとも聞いているが、現状はどうか。

事務局：全体の児童生徒数は減少しているが、特別支援学級の児童生徒数は増えているという認識はある。

委 員：保護者、子どものニーズも多様化している。特別支援の視点も重要だと思う。

委 員：ここ数年来特別支援学級で学ぶ児童生徒は増えていると感じる。学級数も増えている。定員は1学級8人だが、実態に応じて個別最適な学びとなるよう、工夫して取り組まれている。

委 員：特別支援学級や不登校支援のSSRなど、多様な子どもたちに対応できる学校が求められている。

委員：先生が足りないという声も聞く。尾道市はどのくらい教員が不足しているのか。また、それは小中一貫校になると解消されるのか。

事務局：教員配置については担当課が違うのではっきりしたことは分からない。

委員：教員の勤務形態が多様化しており、それに伴う代員が見つからないという感覚である。

委員：多様な学びを保障するためには、人材確保が重要だと思う。

第1回尾道市立小・中学校の在り方検討委員会  
グループ協議（Cグループ）

1 日 時 令和7年8月8日（金）20：00～20：40

2 場 所 尾道市役所4階委員会室

Cグループ

委 員：どれくらい先の計画を考えているか。

事務局：決まったものではないが、教育委員会としては、10、20年先ぐらいのイメージである。

委 員：これから、その計画が決まっていくということか。

事務局：答申をいただいて、新たな再編計画を教育委員会で作っていくことになる。在り方検討委員会と並行して、再編計画については、研究している。

委 員：尾道みなと小・中学校の合併について、平成23年の再編計画では、決まってい行われたのか。

事務局：平成23年の再編計画では、校舎の耐震化を掲げていたので、久保小、長江小、土堂小については、尾道みなと小学校に統合した。

委 員：平成23年の再編計画が生かされた結果の統合であったということか。

事務局：小学校については、生かされた結果であったが、中学校については、平成23年の再編計画にはなかった。

委 員：学級数の標準というのは、どこが作っているのか。

事務局：文部科学省が作っている。

委 員：1学年1クラスしかないと、クラス替えがなく人間関係が固定化してしまう。

委 員：クラス替えがあると、なりたい人となれない寂しさがあるから、クラス替えにはあまり意味がないと思っている。先生も苦労されている。生徒が多いと目が行き届かない。今の子ども達は、価値観の多様性がすごくあり、それに先生が1つ1つ対応していくと大変なことになるので、人数が多いことは決して喜ばしいことではないと思う。学力に差があつて、どこに合わせるかということを先生が苦労している。人数が多ければ、余計しんどいのではないかと思う。必ずしも、人数が少ないことを否定するのは、どうかと思うが、予算や文部科学省の考え等もあるから。

委 員：1クラスの人数も40人から35人変わってきているので、より行き届くようにしようとしている。人数が少なすぎると社会性を学ぶ場がなくなるので、人数が多いところで学んで切磋琢磨しようというのが、尾道教育が考えていることである。

委 員：人数が多すぎても少なすぎてもよくないので、適正な人数がよい。

委 員：在り方検討委員会というものが、様々な分野の人が参加し、これからの尾道の学校をどのようにしていこうかという検討委員会を立ち上げられたことがすばらしい。子供が少なくなつて統合したときに、それぞれの地域性というものを、一体化したり協力したりしていくかということが課題かなと思っている。保護者からもそういったことは出ていて、地域性については心配している。

委 員：御調でも島しょ部でも課題である。

委 員：統合については、子どもは新しい環境にする慣れることができる。

委 員：在り方検討委員会の計画は、何年先まで見据えているというものがあるか。

事務局：10、20年で見直しをかけていくようになると思う。

委 員：10年先を見据える必要があるか。過疎等で、今、問題の学校を今検討すればいいのではないか。10年後の話はしなくてもいいのではないかと思うが、予算の関係等もあり、順序などもあるのかもしれない。その辺りは、保護者までわからないので、説明をしてほしい。突然統合の話をするのではなく、「何年後かに統合する話を今しています」等の内容

を保護者、地域に対してもっと公表してほしい。公表されているのであれば、周知不足だと思う。こういった検討会をしますということや内容も、もっとがんばって発信してほしい。

委員：外国人の人口統計がどうなっていくのか。

事務局：外国人だけの人口は、分からないが、出生数の500人の中に入っている。

委員：自分の住んでいる地域に誇りを持つというのも、統合していくことで難しくなるし、地域の良さを生かしながら、統合していくことはさらに難しいのではないか。

委員：どこの世代まで尾道で学ぶか。小中高のつながりをどう作るか。尾道で学んで大人になるというストーリーが描ける会議になればいいなあ。これからの子ども達にとって尾道で学んで大人になって、それでよかったなあと思えるような会議にしていきたい。

委員：小中高の先に大学があるが、20年先を考えたら、もたない大学がたくさんある。

委員：今生まれた子の10年先を考えないといけない。このまま、子ども達の人数が減り続けたら、最低ここまでの学区は守る等、考えていかないといけない。

委員：人が少なくなる、建物が古くなる、ではどうしようかということを考えていないといけない。

委員：地域があって、土地があって、学びの場には空気があるので、地域性というのは大事にしないとといけないけど、逆に言うと人がいないと、教育にならないので、そこのバランスをどうやってとっていくかということは話題になると思う。

第1回尾道市立小・中学校の在り方検討委員会  
グループ協議（Dグループ）

1 日 時 令和7年8月8日（金）20：00～20：40

2 場 所 尾道市役所4階委員会室

Dグループ

委 員：全体説明に対する質問がある方は発言してください。在り方の意見があれば

委 員：教員の定数について、指導力向上について。ある学校で指導に携わっているが、若い先生の指導力に課題がある。この点にも着目する必要があるのではないかと・・・。（教員の指導力も、目指す学校像に必要）

委 員：指導を行うが、経験が浅いので、教職員全体で指導しているが、困難なこともある。

委 員：予算がないとできないと思うので、市教委としてどこまでつぎ込めるか。今後も関心をもって参加していきたい。学校規模等について、人数などによって決める協議と考えていたが、最初のテーマが目指す学校像、子ども像であったことは大変良いことと考えている。学校の環境を整えることは子供たちにとっても大切である。人材育成の手立てが必要。ここが物足りなかった。

委 員：塾のことにに関して。小中学校として塾が必要なものとして考え、小中学校の学習も考える必要があるのではと感じている。学校としての捉え方は？

委 員：塾に行かせるのは、基礎学力または受験のためと考えている。小中学校としては、小中連携として9年間の教育で学力向上を図りたい。

委 員：9年間の教育は、学力向上が一番の目的ということか

委 員：これだけでなくいろいろある。地域とのつながり、尾道を愛する教育などを身に付けるための教育を図るためには、一定規模の学校規模も必要であるし、教員の定数配置も必要。

委 員：学校が充実していれば、塾に通う必要はないかもしれない。

委 員：今後期待される学校像に必要な要素かもしれない。

委 員：学校のクラブ活動について、人数が減って活動ができない状況もある中で、外部の指導者を入れ、他の学校と一緒に活動し、体育の授業でも、他の学校と一緒に活動して、単位を与えれば（授業として認めれば）いいなと考えている。

委 員：理想とする学校として、クラブが活動ができたり、公民館が併設していろいろな活動できる学校などもよい。

委 員：（理想とする学校について）中1ギャップがあれば、小1ギャップもある。三原市で幼小一体型の施設をと提案したことがあるが、実現しなかった。校舎を整備するのに、反対ばかりせず、条件を付け予算をかけて、保護者の納得する施設としてほしい。学校がよくなれば、保護者も行かせたいと考える。人材育成、施設整備と予算が必要である。

委 員：指定学校の変更について、90人って多いのか少ないのか。様々な理由とあるが、何なのか教えてほしい。

事務局：小1と中1は学校選択制度。指定学区の変更はそれ以外の学年。よくあるのは、年度途中で引っ越しを行うが、そのまま元の学校へ通うことがある。

委 員：高西中学校に通うにあたって、小中連携（高須-西藤）はありがたい。35人中、西藤小学校は5人程度なので助かっている。

⑦尾道市として、子どもたちに尾道に残ってほしいのか、羽ばたいてほしいのかが見えない。

④尾道市の人口が減る中で、尾道に子どもたちが残っていかないと、最終的には尾道市に学校が1校になるような状況も考えられる。この状況を想定して、今後の在り方も考える必要があるのか。

- ㊦先生の働き方改革が言われるが、これを言われると保護者として何も言えなくなる。
- ㊧9年間の一貫教育といっても校長先生は異動で変わる。(そうなれば方針も変わる)
- ㊨科目ごとの専科教員による指導は、一貫教育でないとできないと説明があったと思うが、高須小学校ではすでに行われている。この点については？
- ㊩同じ市内なのに、地域によって教育が異なる。ここは小中一貫？ここは連携など。

全体として、子どもたちに羽ばたいてほしいか、残ってほしいか（グローバル。ローカル）など、教育の問題だけでなく、市全体で考える必要のある内容であると感じている点もある。

委員：それぞれの学校の特色を生かした教育というものがあり、校長はそれに向けて一生懸命取り組んでいる。もし、すべての学校が同じ教育とすれば、それは戦前の教育となってしまう。一貫教育では、中学校の先生が小学校で授業を行うこともできる点はいいい点である。校長が変わっても、地域も交えてコミュニティ・スクールなども含めて方針を決めている。逆に言うと校長の好きにはできない状況がある。